

審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

本研究の目的は、メルロ＝ポンティの身体論に基づいて体育教師論を再考し、新たな視点として〈身体としての体育教師〉という教師の在り方を提示することである。このような体育教師の身体の意味を検討する試みは、従来の体育教師論では検討されておらず、体育学における研究として独創性を有している。また、体育教師という存在者を哲学的に問うことも、これまでの体育科教育学を中心とする体育教師論には欠けていた視点である。特に本研究は、体育教師論を現象学的視点から批判的に問い直す中で、今日の議論が実証科学的な研究方法へと偏重していることを指摘し、そこに生じている課題を浮き彫りにする。そのことによって、その課題を解決するために、生きられた世界に住み込む体育教師の在り方を明らかにしている。本研究によって提示された〈身体としての体育教師〉という新たな在り方は、体育教師論にとって不可欠な論点であり、教師論のみならず教員養成にとっても意義のある研究である。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

本研究は、教育現場を背景にした哲学的研究であり、研究方法として現象学的身体論、特にメルロ＝ポンティの身体論に依拠している。より具体的には、彼の現象学的身体論の中から、「〈考えないでしまったこと〉への視線」という基本的な考察態度と、「〈内破する思考〉」という方法的な手続きを抽出し、それらを研究方法として適用している。前者の考察態度は、他の多くの現象学者の議論にも共通して指摘できるものであり、また後者は、メルロ＝ポンティの思考の特殊性を表すものと言えよう。現象学における基本的な考察態度とメルロ＝ポンティ独自の特徴を捉えた本研究の方法は、科学的方法では扱うことの困難な体育教師の身体を論ずるために、必要かつ妥当なものと考えられる。加えて、考察結果を補強しその妥当性を確保するために、多くの先行する関連文献を参照している点も、体育・スポーツ哲学領域における研究方法として適切なものである。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

本論文は、体育教師論に関する文献による研究であり、全体を通してテーマに関連する文献は広範かつ丁寧に考察されている。第1章は、身体についての予備的考察にあてられ、教育的関係における身体および教師の身体に関する先行研究が広く検討されている。第2章においても、文献によって従来の体育教師論の論点が俯瞰的に把握され、その批判的検討によって研究課題を明確にしている。また第3章以降においては、考察を裏付けるために、基本的にメルロ＝ポンティの身体論に基づきながら、他の現象学的身体論の議論についても適切に言及され、考察が展開されている。よって、本研究の妥当性と客観性が確保されていると言えよう。

(4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか

本研究の現象学的な考察は、体育教師論に〈身体としての体育教師〉という新たな視点を提示するために不可欠であり、かつ妥当性がある。導かれた結論は、次の4点である。①実証科

学的な研究方法に偏っている今日の体育教師論において、哲学的な視点から捉えられる教師の身体という論点が不可欠である。②その体育教師の身体は、さまざまな〈体育教師らしさ〉を身体文化として獲得している。③体育教師の発する指導言語は身体文化の1つであり、したがって指導言語の在り方もまた体育教師の身体の在り方に深くかかわっている。④そのように体育教師が身体として体育授業を生きていることは、その身体が体育教師の実存を支える働きを担っていることを意味している。結論を導く考察の主要部分は、すでに査読付き原著論文ならびに国際学会での発表を経て構成されており、学術的な水準に達していると判断される。

(5) 取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

本研究は、教師論の中でも特に体育教師という存在そのものに目を向け、その存在を担う身体の意味を明らかにしている。このことは、指導技術の実証科学的な探求に陥りがちな今日の体育教師論に欠けている視点、すなわち、指導技術や教育内容さらには学習論において、従来前提とされ考察対象とならなかった体育教師の在り方そのものの重要性を明示した点で、大きな意義を持つと考えられる。さらに、ICT等の科学技術を駆使した教育形態が導入されようとしている今日の学校現場において、教師が児童・生徒の前に身体として存在することの意味が見落とされているが、教師と児童・生徒との関係によって教育が成り立つならば、体育教師論において身体としての体育教師という在り方は、最も根源的かつ重要な事象であり不可欠の論点になることがわかるであろう。

新たに提示された〈身体としての体育教師〉という在り方は、身振りや立ち居振る舞いといった身体文化を介して児童・生徒に非言語的にかかわり、さらには、体育教師の発する指導言語の在り方を規定している。その指導言語は、単なる記号としての働きを有するだけでなく、むしろ体育教師の身体的所作として児童・生徒に〈ふれる〉という在り方をしている。だからこそその在り方は、個々の体育教師の実存に深くかかわり、彼らの実践的な状況における存在意義を支える働きをすることになる。この身体としての体育教師という在り方は、指導技術を支える主体の問題を明瞭かつ具体的に示すものであり、今日の体育教師論における新たな知見である。さらに言えば、本研究の体育教師の身体に関する議論は、体育に限らず教師一般の身体に関する今後の議論に多くの示唆を与えるものであろう。よって、本研究論文は博士（教育学）の学位にふさわしい意義と研究の成果が認められる。